

館林キリスト教会 デボーションノート（2007年）

3月 1日 今日の通読箇所 サムエル記上4：1～18

サムエル記上 4章1～18

サムエルは幼児のころと違って12才ごろになると、さすがにエリ一家の様子を見て、矛盾と疑惑に苦しんだと思う。それ故か、サムエルが最初に聞いた神の直接の声は、エリ一家の裁きに関するきびしい神の宣告であった。いくばくならずしてサムエルは、エリ一家に行われた神の裁きと、彼らに導かれたイスラエルの敗戦を目撃したが、これは彼に終生忘れられぬ印象となり、いわゆる「神を恐れる敬虔」をもって、一生を生きる助けとなった。

3月 2日 今日の通読箇所 サムエル記上5：1～12

サムエル記上 5章1～12

神に従がわないイスラエルが、そのまま神の祝福に止まる事はみ心ではない。その敗戦は、神の祝福を失った自然な結果であった。しかしながらこれによってペリシテ人が勝ち誇り、彼らの神ダゴンに栄光が帰せられることを神はお許しにならない。神は自ら偶像ダゴンに侮辱を加え、イスラエルと戦ったペリシテ人に、わざわざお与えになった。人々は真の神の臨在とその裁きによるわざわざを恐れ、戦利品だと思っていた「主の箱」をもてあますに至った。

3月 3日 今日の通読箇所 サムエル記上6：1～16

サムエル記上 6章1～16

旧約時代には、神様がイスラエルにお与えになった「実物教育、教材教育」のようなものもあって「神の箱」が、神の臨在の象徴であったことなども、一つの実物教育であった。その神の臨在は、罪人に対しては裁きであり、呪いである。いまペリシテ人はそれを経験した。しかし、罪のゆるしのために流されたキリストの十字架の血のあるところ、いつも神は恵みと祝福をもって臨在し給う。ベテシメシの人々が神の箱をうけ入れた時にささげた、燔祭その他は、旧約時代においてキリストの贖罪を予表するものだった。それゆえ神の箱は祝福をもってそこに止ったのである。

3月 4日 今日の通読箇所 サムエル記上7：1～17

サムエル記上 7章1～17

サムエルの指導のもとに、イエラエルの人々は深く悔改め、国民の宗教的・道徳的状態は回復してきた。かくて二十年、恐ろしい敗戦の記憶もなまなましい、あのエベネゼルで、今度はペリシテ人に対する決定的勝利を得ることができた。サムエルはここに記念碑を建てて「エベネゼル(主は今に至るまで我々を助けられた)」と名づけた。少年時代に献身して奉仕を始め、ついに今日の祝福と勝利に至ったサムエルの感慨も、同じく「エベネゼル」であったろう。

3月 5日 今日の通読箇所 サムエル記上8：1～18

サムエル記上 8章1～18

サムエルが老年になった時、後継者になる予定だった息子たちは、人々の信頼を裏切り、悲しむべき状態だった。しかしそれにしても人々が急に、祭司でなく士師でなく、サムエルでなく、その子らでなく「王」を求めた態度は軽率である。「王制」は、前から神によって預言されてもいたし、時代の要請でもあった。それ故むしろ今の問題は「王様さえ立てれば万事OK」という、手放しな人々の態度だった。サムエルは今、私情をおさえ、念のために「絶対服従」「強制兵役」「莫大な税金」など王制にともなう負担の覚悟をうながし、結論として王制を承諾したのである。

3月 6日 今日の通読箇所 サムエル記上9：1～14

サムエル記上 9章1～14

サムエルはイスラエル初代の王を任命することになったので、国内の有力な人々の中から、人物の物色を始めたが、それにもまして神のお選びとお示しを求めた。ベニヤミンのキシ一族は、有力で、その息子サウルは勇武で賢明で、容姿もまた人にすぐれ、評判の人物だった。今は素朴な日常の業務にたずさわっているが、その間に次第に神の導きが示され、いよいよツツで、巡回中のサムエルに直面するはこびとなる。

3月 7日 今日の通読箇所 サムエル記上9：15～27

サムエル記上 9章15～27

最初の王の人選は難事であった。結局神様の選びと導きによってサウル王が立てられたのであるが、その間「王を立てよ」とサムエルに迫った人々は、王の人選についても多かれ少なかれ発言したろうし、サムエルとて、ただ祈っていただけでなく、研究も話し合いもあったと思う。しかし最終的には、いくつかのしるしによって神の導きがはっきり示されたことによって決定した。

3月 8日 今日の通読箇所 サムエル記上 10 : 1 ~ 13

サムエル記上 10章 1 ~ 13

サウルはサムエルの油そそぎを受けて、イスラエル初代の王の任命を受けた時、さすがに恐れととまどいを感じたと思う。神は三つのしるしを与えて、彼の信仰をはげまして下さった。第一にサムエルの言葉どおりに、さがしていたるばが見つかったこと。第二に、神殿に献げるつもりで運ばれて来たパンが、サウルに提供されたこと。第三に、預言者の一群にまじってサウルも靈感を受け、預言したことである。最後のものは、サウルを知る者にとって、特に奇異なしるしであったので、後日、ことわざになったくらいだった。

3月 9日 今日の通読箇所 サムエル記上 10 : 14 ~ 27

サムエル記上 10章 14 ~ 27

いよいよサウルはイスラエルの王として、国民の前に立った。恐らく身長が高く、勇武、まことにりっぱな人物であって、前から候補者の一人であったと思うが、それと共に初心(うぶ)で謙遜で、最初は隠れていて出て来なかった。彼に対して国民の大部分が何となくそらそらしく、すぐに具体的に王様らしくはなれなかったが、案外無頓着で、さっさと家にかえり、もとの仕事に精を出しながら黙々と時節を待つところなど、本当に信仰的な好青年だった。

3月10日 今日の通読箇所 サムエル記上 11 : 1 ~ 15

サムエル記上 11章 1 ~ 15

アンモン人によって、ヤベシギレアデが包囲された、というニュースが入った時、ギベアの人たちは悲しみ恐れて泣いた。こういう不信仰、敗北感、孤立主義が、今日までイスラエルが外敵にあなどられ、勝手に侵略をされていた理由なのである。しかるに同じニュースはサウルを奮起させた。そしてただちにイスラエル諸族に、団結と協力と出兵を求めた。と言うよりも命令した。その結果、みごとにヤベシギレアデを救い、これがサウル王の初手柄となった。

3月11日 今日の通読箇所 サムエル記上 12 : 1 ~ 18

サムエル記上 12章 1 ~ 18

サウル王はいよいよ実際的かつ積極的に、王国の建設に着手することになった。ヤベシギレアデ戦争の実績によって、全国民の一致した支持と協力を得ることになったからである。ここでサムエルは、一応直接に国民を指導する責任の半分を解かれたことになるので、サウル王と国民に大切な訓辞を与え、長いイスラエルの歴史を示し、信じ従う者のみを助け祝福し給う、神の恵みのみ業を思い起こさせ、つづいて神様に対する信仰と服従を誓わせたのである。

3月12日 今日の通読箇所 サムエル記上12:19~25

サムエル記上 12章19~25

イスラエルが王政に移行するのは自然であったが、神の導きを求め、時期と方法を考えるという態度に欠け、急いで制度を新しくし新しいリーダーさえ立てればそれで万事OK、という、人々の不信仰軽卒はまずかった。しかしいずれにしろ結果としてはサムエルの時代は終わった。いま彼は解職隠退の老後においても、二つの事は決して止めないと誓った。その一つは「教えること」他の一つは「祈ること」であってサムエルにとっては、これらをやめるのは、罪であるという自覚があった。

3月13日 今日の通読箇所 サムエル記上13:1~18

サムエル記上 13章1~18

長年イスラエルを属国あつかいにして来たペリシテ人は、今やサウル王を立てて独立しようという勢いになって来たイスラエルに対して緊張し、イスラエルもまた徹底抗戦の準備を進め、再び決戦の場面となった。この時サウル王は、サムエルとの約束を守り、礼拝がすむまで進軍開戦をひかえていた。しかしくずくずする間に、長い緊張恐怖に耐えかねたイスラエルの民兵たちの中には、こっそり逃げ去る者が増え、いわゆる戦機が失われるのにあせって、とうとうサムエルを待たずに自分で燔祭をささげ、勝手に礼拝を執行したが、これが彼の第一の失敗となった。

3月14日 今日の通読箇所 サムエル記上14:1~15

サムエル記上 14章1~15

サウルの子ヨナタンは、サウル一族の勇武の血を受けただけでなく、非常に信仰に厚い青年だった。両軍にらみ合いの状態の中から開戦のキッカケを作ったのも彼だったし(13章3節)今度はまた勝利のキッカケを作ったのだ。「多くの人をもって救うのも少ない人をもって救うのも、主にとっては何の妨げもない」というその言は、後世まで、神を信ずる者の勇気を奮い立たせる言となった。本当にゲーテのいうように「勇気がなければ何もない」場合も多いのだ。

3月15日 今日の通読箇所 サムエル記上14:24~35

サムエル記上 14章24~35

ヨナタンによって戦争が有利に転回し始めると、それまで恐れていたサウルは、逆に興奮してせっかちになり、一気に完全な勝利を得ようと、あせったあまり、兵士たちに作戦中の食事を禁じた。食事の時間も惜しかったのだが、更にこう

ということで、全軍の誠意熱意を神様に見てもらおうと、誓いを加えたことなど、すでにサウルの心には、神に従い神にまかせる信仰はなくなり、やみくもな自分の気持ちだけが先に立ち、やり方は大分迷信じみたものとなって来た。

3月16日 今日に通読箇所 サムエル記上14：36～46

サムエル記上 14章36～46

サウルは激越な性格で、言ったことはあくまで通す。ヨナタンがサウルの命令を知らず、野生の蜂蜜を食べて命令違犯をしたというので、王子であり、戦勝の功労者であるにもかかわらず、処罰しようというのは、あんまりひどすぎる。しかもそこに神の御名を出して来るのだから、迷信的、独断的態度は恐ろしいものだ。人々はこれに反抗してヨナタンを助けたが、あまりのことに白けて戦意を失いサウルの意気ごみとは反対に、不徹底な勝利のまま、イスラエル軍は引上げてしまうことになった。

3月17日 今日に通読箇所 サムエル記上15：1～23

サムエル記上 15章1～23

ペリシテ、アマレクからの解放独立ということは、イスラエルが王制という形で実現した拳国体制の、そもそもの目的だったから、次の作戦は当然アマレクに向けられた。サウルはこれらの作戦を、神の命令によって実行したのであるが、しかし今度の場合も、サウルの服従はいつものように不徹底で、イザという時に地金が出て、神のみこころよりも、自分の判断方針が先に立つ。とうとうこれが彼の致命傷となった。この前の時は、恐怖焦燥のあまりという事情もあったが、今回は誇りと物慾が動機だった。まことに芳しくない推移進展ではある。

3月18日 今日に通読箇所 サムエル記上16：1～13

サムエル記上 16章1～13

サムエルの子供たちは愚かであって、人々の非難を受け、サムエルの後継者とはなり得なかった。サムエルによって任命されたサウル王は、不信仰不従順のため、神の祝福を失い、王として不適格であることは、すでに歴然としている。サムエルももうイヤ気がさして、不信仰、人間ざらいになっても仕方のないところだが、今また神の示しに従い、少年ダビデに任職の油をそそぐ。しかも危険なのでサウルには秘密だ。老サムエルの信仰と勇気、忍耐とねばりは本当に大したものだ。

3月19日 今日の通読箇所 サムエル記上16：14～23

サムエル記上 16章14～23

悪魔が人を誘惑する時は、人に大胆を与えて神をあなどらせる。さて人が神に背いて罪を犯すと、今度は、自責と恐怖と絶望で人の心をさいなみ、再び彼が神に立ち返ることがないように仕向ける。ここに「神から出た悪霊」というのは、自らその道を選んだサウルが、悪魔に苦しめられているのを神がしばらく放置なさる、その状態を言うのかも知れない。少年ダビデはその反対で、推薦されてサウルの従僕となるや、その純粋な信仰と美しいさんびは、憂愁のサウル王をなぐさめた。未来の大ダビデ王は、こういう奉仕者として聖書に姿をあらかわす。

3月20日 今日の通読箇所 サムエル記上17：1～18

サムエル記上 17章1～18

ペリシテの巨人ゴリアテは身長三メートル、上から下まで青銅のよろいで武装し、穂先の目方だけで七キロもあるやりをしごいて、イスラエル軍に挑戦すること四十日、サウル王はじめイスラエル全軍は萎縮して声も立てず、敗北は時間の問題と見えた。彼は教会の戦いの前に立ちふさがる悪魔と、この世の力の象徴である。我々が信仰生活を全うするのも、伝道して人を救いに導くのも、この場合のゴリアテに勝つと同じ困難な戦いで、ただ神の力に頼る以外にないのだ。

3月21日 今日の通読箇所 サムエル記上17：31～49

サムエル記上 17章31～49

ダビデはサウル王が貸してくれた、立派なよろいかぶとを辞退した。どんなに立派に見えても、使いなれず、身についていない物はかえって邪魔だ。そして日ごろから使いなれた石投げで、ゴリアテに立ち向かうことになった。そのかわり熟練した手で、なめらかな五つの石を捨てて用いたのである。彼は「神のみ名によって」ゴリアテを倒し、イスラエルを勝利に導いた。我々は外見の立派な、大げさな武器で戦う必要はない。子供っぽくても、しろうとらしくても、使いなれた手持ちの武器が良い。そして我々が「主のみ名」によって立つ時、必ず勝利が与えられるのである。

3月22日 今日の通読箇所 サムエル記上18：1～19

サムエル記上 18章1～19

ダビデがゴリアテを打ち殺したことは、イスラエル軍大勝利のいとぐちとなっ

た。過去に何回も同じような手柄を立てた王子ヨナタンは、ダビデを尊敬し、期待し、また深くダビデを愛した。その友情は終生変わらず、旧約を通じての美談となってゆく。これに反してサウル王の心には、国中に高まってゆくダビデの人氣が、苦い嫉妬心の刺激となって受け取られた。他人の成功幸福の話は、ともすれば人の心に、嫉妬を呼び起こすものだが、この場合のサウル王の悲劇は、祈りのうちに、その心を神にきよめ整えて頂くことができなくなっていた事実だった。

3月23日 今日の通読箇所 サムエル記上18：20～30

サムエル記上 18章20～30

ダビデは今や、サウル王の宮廷において、人氣絶頂のスター的軍人だった。サウル王は彼と、王女メラブとを結婚させようとしたが、謙遜で慎重なダビデは、これを辞退した。ところが今度は、妹王女ミカルが、深くダビデを愛し慕っているの、ミカルとの縁談が始まった。ダビデはもともと愛に感ずる人物である。しかもこの縁談には、ダビデの勇氣と戦斗力をテストするための、サウル王の軍事的命令が抱き合わせになっている。勇敢なダビデは引っ込んでそれを見送ることができない。とうとう命令をを実行し、かつミカルと結婚することになった。以後ダビデは危険の多い国境警備の任務につくが、これもまたサウル王に下心あつてのことだった。

3月24日 今日の通読箇所 サムエル記上19：1～17

サムエル記上 19章1～17

精神分裂でもあるまいが、今やサウル王の精神も言動もすでに分裂している。悔い改めない罪の呵責のために、靈的な暗黒の中において、神に祝福、助けを祈ることができず、信仰の確信もない。ヨナタンの忠告を聞けば、国王としての義務と責任に目覚める。この調子で、筋違いな嫉妬でダビデを憎み攻撃して行くようでは、やがては人望を失い、宮廷も国家も治まらなくなって、結局国王としての自分の将来のためにならない。それもよくわかるのだ。しかしそれでいて、ダビデに対する嫉妬がムラムラとして来ると、自分でもどうにも押さえることができないのだ。

3月25日 今日の通読箇所 サムエル記上20：1～17

サムエル記上 20章1～17

ダビデは罪もないのに、サウル王の追求を恐れて逃げまわらなければならない。いわゆるお尋ね者になってしまった。ひそかにヨナタンを訪問して、自分の苦

しい立場を訴えると、ヨナタンは命がけで父サウル王に対して、ダビデを弁護して見ることを約束した。その結果、もし父王のダビデに対する憎しみが変わらないようなら、ダビデの亡命に賛成し、かつ援助を惜しまないことを約束した。本当に、持つべき者は良き友である。ヨナタンはまた、最近の父サウル王の様子から、やがてサウル一家の運命が決まることを予想し、しかし自分は父の子として、最後までサウル王と運命を共にすべきことを、悲しくも決意していたのである。

3月26日 今日に通読箇所 サムエル記上20：26～42

サムエル記上 20章26～42

気の合った親しい友達との交わりは人生の喜びであるが、愛別離苦という言があるくらいで、人と別れるのは悲しい。今ヨナタンとダビデは、まことに余儀ない事情で相別れなければならなかった。ギベアに近い野原での別離のあとの二人は、ほとんど再び、合うことはないのである。やがてヨナタンは、父王サウルと共に戦死して、ダビデは国王となるが、二人の友情が本当に実を結び、自由に妨げられることのない、長い愛の交わりが許されるのは、天国においてである。

3月27日 今日に通読箇所 サムエル記上21：1～15

サムエル記上 21章1～15

これからダビデは、泣いても泣き切れぬ、恐ろしく孤独な年月に耐えなければならなかった。今よろめくように祭司をおとずれ、秘密の公務であると偽って、供えのパンでわずかに飢えをしのいだのもやむを得ない。五尺の体の置き所のないまま、心ならずも異邦の王に頼ったが、そこでも身の危険を感じ、みっともない狂人のまねを真剣に演じて、かるうじて逃れたなど、身に覚えのない迫害と追求を避けつつ放浪する姿は、何とも気の毒の至りであった。

3月28日 今日に通読箇所 サムエル記上22：1～23

サムエル記上 22章1～23

サウル王の悪政の下では、苦しみ不満を抱く者も多かった。彼らは、かねがね尊敬信頼するダビデが、自分たちと似たような悲劇に陥るのを見て、一つはサウル王を見張り、一つはダビデのために一肌ぬぐつもりで、次々とダビデのもとに集まって来たので、勢いのおもむくところ、ダビデはいつの間にか、相当な徒党の首領となるに至った。それにしてもダビデを追うために一国家の兵力を手兵の如く動員するのみか、ダビデの逃亡に手を貸したという訴えに対して、

深く実否をただしもせず、こともあろうに、今のサウル王は狂乱状態という他ない。「嫉妬は骨の腐れだ」と言われるが、本当に恐ろしいことだ。

3月29日 今日の通読箇所 サムエル記上23：1～18

サムエル記上 23章1～18

サウル王はダビデを追いかけるのに忙しく、兵隊はもっぱらそっちの方に動員されていて、肝心の国王本来の職務（国境の町々を外敵の侵略から守ること）などは、おさんからの有様だった。今、ダビデとその一党は、無冠、無報酬の身をもって、神より受けた命令に従い、私設パトロールとして国境を巡回し、町々を守った。それにもかかわらず、ケイラの町の人々のように、サウル王を恐れ、あるいはへつらって、ダビデを裏切り、サウル王に渡そうという者もいた。その間、危険を恐れず、もう一度だけダビデを訪れたヨナタンの友情は美しい。

3月30日 今日の通読箇所 サムエル記上24：1～16

サムエル記上 24章1～16

ダビデは少年時代、すでに国王として選ばれ、サムエルによって油そそがれた人物である。サウル王はすでに神の祝福を失い、国王の職務を怠り、ただ自分の地位と権勢に執着し、軍隊をも手兵化している。これに反し、今や力に応じて、王の使命職務を、実質的に努めているのはダビデである。しかも理由なしに命をねらわれているダビデには正当防衛権もある。しかしダビデはチャンスがあっても、サウルに手向おうとはしなかった。そして自分の生命も、使命責任も、サウル王の裁きも、一切神にまかせた。

3月31日 今日の通読箇所 サムエル記上25：1～17

サムエル記上 25章1～17

ダビデは集って来た数百名の手下をひきいて、私設国境パトロールを続けていたので、サウル王の怠慢にもかかわらず、国境の人々の生活は安全に守られた。これに感謝した有力な人々が、ダビデとその一党のために食糧その他を提供し、生活をサポートしたのは自然である。ところが中にはナバルのような人物がいて、いばったり欲ばったりするだけで、ダビデに対して、一向感謝の態度を示さず、協力しないものもいた。本当に、「馬鹿（ナバル）につける薬はない」と言うものだ。